慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中ソの「人民民主主義」論 (三・ 完) : 中ソ関係の一考察
Sub Title	China and Soviet theory of "People's democracy" (3)
Author	平松, 茂雄 (Hiramatsu, Shigeo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1964
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.37, No.6 (1964. 6) ,p.45- 60
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19640615-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中ソの「人民民主主義」論（三・完）

――中ソ関係の一考察――

平松茂雄

第一章　問題の所在
第二章　中華人民共和国成立前における理論的諸問題
　第一節　背景
　第二節　「人民民主主義」理論の形成と発展
　第三節　毛沢東と「新民主主義」理論……以上前々号
第三章　中華人民共和国の成立と中国の「人民民主主義」
　第一節　スターリンと中国の「人民民主主義」
　第二節　「人民民主独裁」と「人民民主主義」
第四章　スターリンの死と中国の「人民民主主義」
　第一節　スターリンの死と中ソ関係
　第二節　中国における社会主義への「過渡期」の特質（一）
　第三節　中国における社会主義への「過渡期」の特質（二）……以上前号
第五章　フルシチョフと中国の「人民民主主義」……以下本号
　第一節　フルシチョフ路線の形成
　第二節　二十回大会と社会主義への中国の道
　第三節　中共八全大会と中国の「人民民主主義」
第六章　結　論

第五章　フルシチョフと中国の「人民民主主義」

第一節　フルシチョフ路線の形成

スターリンの死は、社会主義陣営におけるスターリン主義の終末であつた。それゆえスターリンの後継者たちの直面した問題は、陣営の「統一」と各国の「多様性」の承認をいかに均衡せしめるか、

ということであつた。[1] スターリン時代にはわずかの偏向も許容されえなかつたから、このような問題ははじめから問題とならなかつた。各国の共産党は、その国内政策を形成する過程でどのていどまで独立をもちうるか。ソ同盟の経験はどこまで普遍的な価値を有するのか、それとも他の国でくり返される必要のない歴史的な特殊性であるのか。また、社会主義への多様な道は存在しうるか。こういつた

問題が、スターリンの死後彼等の前に提起されていた。[2]

マレンコフのいわゆる「新政策」の特徴は、スターリン主義の政治をそのままにしておいて、スターリン主義の経済の弊害、すなわち生産と消費のあいだの過度のアンバランスが生んだ経済の行詰りを緊急に是正するため、重工業優先の経済政策を消費財・農業生産増大のそれに切換えた点にある。[3] ところが、一九五四年後半から五五年初頭にかけてマレンコフの新政策を批判することによつて抬頭したフルシチョフは、それゆえ当然に重工業重点政策を主張し、したがつて経済的にスターリン主義であつた。しかしマレンコフ時代の比較的に開放的な経済政策の結果、フルシチョフによる正統的な経済政策への復帰は、スターリン主義の政治をそのまま継続し保持することを不可能にした。経済的に譲歩することによつて、マレンコフは当面政治を無視することができた。これにたいし、経済的に「新」スターリン主義を主張したフルシチョフは、スターリン時代には想像もできなかつた政治的自主性すなわち多様性を許容する一方、共通の経済政策およびイデオロギーを強調して、社会主義陣営の統一と強化をはかろうとした。[4] そしてフルシチョフが最初にとり組まねばならなかつたのが、社会主義への「独自の道」を歩んでいる中国とユーゴスラヴィアであつた。のちに二十回大会において提起されることになる「社会主義への多様な道」というテーゼは、すでにこの時期に、すなわちフルシチョフが指導権を確立してゆく過程において形成されたものであり、このテーゼをめぐつて正統派＝モロトフ派とのあいだに深刻な対立のあつたことがわかる。[5]

同じく社会主義への「独自の道」を歩みながらも、ソ同盟にとつて中国はユーゴスラヴィア以上にやつかいな存在であつた。なぜならば、「ユーゴスラヴィアは社会主義陣営に属していないことを自ら表明していたのにたいし、中国はその一員である」[6] からであつた。問題は、中国がはたして社会主義へ移行しているかどうかであつた。この問題は、スターリンの死によつて主な障害が除去され、かつ中共が「過渡期の総路線」にのりだしたので、いつそう刺戟された。

一九五四年一月『コムニスト』誌は、中国が社会主義へ移行していることをはじめて容認して、次のように論じた。

「一九五三年、中華人民共和国は経済建設計画に着手した。人民政府と共産党は、相当長い期間にわたる社会主義的工業化および農業・商業その他の国家経済部門の社会主義的改造を実現している。それゆえその政策は、新民主主義国家の形成という最小綱領から中国における社会主義社会の建設という最高綱領への漸次的な移行をめざしている。[7]」

この論文は、人民共和国の成立をもつて社会主義革命の開始とす中共の主張には触れなかつたが、二月号の同誌に掲載された論文のなかでクルドフは中共の主張に承認を与えている。彼は、「ソ同盟によるファシスト侵略国家の破壊は、世界の革命勢力の増大・強化および帝国主義勢力の弱化と孤立をもたらした。このことは、一連のヨーロッパおよび中国をふくむアジアの国々が資本主義制度から離脱し、社会主義へ移行する道に入つてゆくことを可能にした[8]」

とのべたのち、次のように論じた。「二つの歴史的な課題（反封建・反帝―引用者）を解決することによつて、中国人民は本質的に中国革命の第一の段階を完了し、社会主義的工業化の段階、社会主義経済建設の段階への移行のための基礎を準備した」[9]と。

ソ同盟が「過渡期の総路線」を完全に受けいれたのは、それが打ちだされてからちようど一年後の一九五四年秋、すなわち『中華人民共和国憲法』制定のときであつた。同年十月「社会主義への途上にある偉大な中国人民」と題する論文で、アヴァーリンは「人民革命が勝利した結果、中国では、古い半封建的・半植民地的制度から、帝国主義の支配下から、新しい人民民主主義制度への、民族独立と社会主義建設への根本的な変革がなしとげられた」[10]とのべた。アヴァーリンは、中国共産党がマルクス・レーニン主義理論にもとづいて、「解放運動と過渡期に関する戦略・戦術の根本的な諸問題を中国の条件に創造的に適用した」[11]と論じた。

「中国において社会主義への移行が半植民地的・半封建的制度から始められたことは、社会主義への移行の形態に関する中国の特殊性を付与している。とくに、中国の民族ブルジョアジーは比較的力が弱かつたため、第二次世界戦争以後反帝国主義闘争に参加するか、あるいは中立の立場をとつた。中国共産党は、民族ブルジョアジーを人民民主統一戦線に引きいれるのに成功した。したがつて、民族ブルジョアジーの企業を平和的漸次的に改造すると同時に、私的企業家の組織的・技術的経験を利用するという政策は、工業発展のために私的資本主義部門を最大限に利用する可能性を保障している。」[12]

アヴァーリンはもはやスターリンに言及することなく、レーニンの社会主義への多様な道の必然性に関する言葉を引用した。「人口がはるかに多く、社会的条件の多様な点でもはるかに特色をもつている東洋諸国の将来の革命が、疑いもなくロシア革命よりも大きな独自性を示すだろう」[13]。社会主義への道の多様性にもかかわらず、「過渡期における中国の人民民主主義の階級的本質・目的および任務は」、ソ同盟のそれと「同一である」ことをアヴァーリンは強調した[14]。

同年十月一日、中華人民共和国成立五周年記念および新憲法制定にさいして北京を訪問したフルシチョフは、社会主義への中国の道を称讃して次のようにのべた[15]。「労働者階級が指導的役割を果す人民民主独裁は、漸進的に社会主義へ移行させる計画を中国人民の前に打ちだした」。「中国人民が闘いとつた、すべての成果は中華人民共和国憲法で立法化され（それは）中国における社会主義社会建設の憲法と正しくもよばれている」。「ソ同盟人民は、中国共産党の手になる偉大な社会主義建設計画を成功裡に実現するよう心の底から望んでいる。」

フルシチョフの中国訪問は、中ソ両国の友好増進に大きな刺戟を与え、その後のソ同盟のイデオロギーを方向づけることになつた[16]。フルシチョフは北京で、「ソ中両国民の打ち破りがたい同盟と兄弟的な友情とは、社会主義陣営諸国間に打ちたてられたまつたく新しい国家関係の模範となつている」[17]と強調したが、その「まつたく新

しい関係」とは、マルクス・レーニン主義への独創的な貢献を主張しながらも、その根底ではマルクス・レーニン主義の普遍的真理をかたく信奉している、中共の一貫した立場である。フルシチョフは、かかる「新しい関係」をユーゴスラヴィアとのあいだに打ちたてようとした。東欧諸国の変化および一九四八年以前におけるチトーのソ同盟にたいする忠誠を想起したフルシチョフは、「ユーゴスラヴィアとの闘争がイデオロギー的に不毛であり、それが死んだ独裁者の病的な恐怖症の所産である」と断定し、「チトーの自主性を許容する一方共通の党の結びつきを強調することは、東欧諸国の共産政権を不動のものとするにあたつて模範となるであろう」と考えたのであつた。[18]

ソ同盟のユーゴ接近は一九五四年の秋に早くも現われているが、[19]それが、具体的な形をとつたのは一九五五年五月のフルシチョフのユーゴスラヴィア訪問であつた。五月二十六日ベルグラード飛行場でフルシチョフは、一九四八年の断交についてのソ同盟の誤まりを謝罪し、かつて破門をいいわたした原因そのものにソ同盟の承認を与えた。自分自身の「社会主義への道」を選ぶ権利を各国がもつていること、および各国は自分の家の主人であることの二条件がいさぎよく容認された。[20]六月二日調印された共同宣言は、ユーゴスラヴィアが社会主義を建設している国であることを改めてはつきり認めて、次のようにのべている。

「いかなる理由があるにせよ、経済であれ政治であれ思想的なものであれ、国内問題にたいして相互尊重を旨とし、不干渉の原則に従う。国内組織の問題、社会制度の相違、社会主義発展形式の相違は、あくまでも各国独自の関心事だからである。」[21]

ユーゴスラヴィアとの和解に続いてソ同盟では、社会主義への多様な道あるいはソ同盟と東欧人民民主主義諸国とのあいだの関係に関する問題が検討された。七月十六日付『プラウダ』紙は、ベルグラード会談についてのフルシチョフの報告を討議した党中央委総会の模様を論評した。[22]

「さまざまな国民の利益にたいしてみじかな注意を払うこと、これこそは民族主義をふくめたあらゆるブルジョア・イデオロギーの主張と根本的に敵対する社会主義的国際主義のもつとも重要な特質である。　ソ同盟と人民民主主義諸国との関係は、社会主義的国際主義のかたい基礎にもとづいている。」

「ソ同盟と人民民主主義諸国の歴史的経験は、社会主義の勝利を確保しなければならないという根本的・基本的な点において統一がえられるならば、それぞれの国は、歴史的特殊性に従つて社会主義建設の具体的諸問題を解決するためにさまざまな形態をとり、さまざまな方法を使うことができることを示している。」

社会主義への多様な道は、ついで十月の『コムニスト』誌および十二月の『哲学の諸問題』誌でも論究された。[23]なかでも『哲学の諸問題』に掲載されたアルヒポフの「プロレタリアート独裁政府の多様な形態をどのように説明するか」は、注目される。アルヒポフは、中国の政府形態を「労働者階級と農民および他の勤労者層との強固な同盟」と規定したが、[24]前後の関係からみてそれをプロレタリ

アート独裁の「一形態」とみなしたことは明白である。アルヒポフは次のように論じた。「マルクス主義者は、すべての国すべての時代にあてはまるある種の抽象的な政治形態を考えたことはけつしてなかつたし、プロレタリアート独裁のある形態に絶対性を与えたことも、他の形態の生じる可能性を除去したこともない[25]。「社会主義革命勝利の具体的歴史的条件の多様性、すなわちそれぞれの国における階級勢力の関係、経済、政治的発展および生活・文化の特殊性などが、プロレタリアート独裁政府形態の多様性を生んでいる[26]」。それゆえ「それぞれの国の発展のあらゆる条件を考慮してのみ、他の政治形態の特殊性や独自性あるいは社会主義建設の方法やテンポを理解することができる[27]」と。

こうした一九五四年後半から五五年末にかけての成果が、一九五六年のソ同盟共産党二十回大会におけるフルシチョフのテーゼを生むことになる。

(1) Brzezinski, "Soviet Bloc," passim.
(2) Ibid., Chap. 8.
(3) Ibid., pp. 155-157.
(4) Ibid., pp. 165-173.
(5) 第二節五二頁で引用するシェピーロフの演説、本節註(22)と、(23)をみよ。また中国に関しては、一九五四年十一月(第十六号)の『コムニスト』誌「社会主義と平和」、一九五五年のメー・デーのスローガン(同四月二十一日付『プラウダ』紙)、同十月革命記念日のスローガン(同十月二十五日付『プラウダ』紙)などにみられる、「社会主義の道を進みつつある東欧諸国」「社会主義の基礎をつくりつつある中国」(傍点は引用者)という特殊な使いわけに注意せよ。なおこれに関連して Schwartz, "Ideology and Sino-Soviet Alliance," p. 134. 参照。
(6) Schwartz, "Ideology and Sino-Soviet Alliance," p. 137.
(7) Г. Ефимов, "Четвертый том избранных произведений Мао Цзэ-дуна," Коммунист, no. 1 январь 1954 г. стр. 120.
(8) И. Курдов, "Великая держава китайского народа," Коммунист, no. 3 февраль 1954 г. стр. 27.
(9) Там же., стр. 28.
(10) В. Аварин. "Великий китайский народ на пути к социализму," Коммунист, no. 15 октябрь 1954 г. стр. 46.
(11) Там же., стр. 47.
(12) Там же., стр. 53.
(13) Там же., стр. 53.
(14) Там же., стр. 53. 次の論文も参照。A. H. Наумов, "Китайская Народная Республика на путях к социализму," Вопросы Философии, no. 5 1954 г. стр. 43-47; В. Масленников, 'Пять лет китайской народной республики," Вопросы Экономики, no. 9 1954 г. стр. 40-41; "Народная Демократия," Большая Советская Энциклопедия, vol.29 ноябрь 1954 г., стр. 133; A. I. Sobolev, "People's Democracy, A New Form of Political Organization of Society," Moscow, 1954, pp. 62. ソ同盟科学院経済学研究所『経済学教科書』(第一版)合同新書版、第四分冊九九二—四頁。

(15) 一九五四年九月三十日北京における中華人民共和国建国五周年祝賀集会での演説。『恒久平和と人民民主主義のために』（日本語版）一九五四年十月八日付第四一号。

(16) Brzezinski, "Soviet Bloc," p. 182.

(17) 前掲フルシチョフの北京における演説。

(18) Brzezinski, op. cit., p. 173.

(19) たとえば、一九五四年十月二十日付『プラウダ』紙、同年の十月革命記念日におけるザブーロフの演説（同十一月七日付『プラウダ』紙）をみよ。

(20) 一九五五年五月二十七日付第二一号「恒久平和と人民民主主義のために」（日本語版）。また同五月十八日付『プラウダ』紙も参照。

(21) 一九五五年六月三日付第二二号「恒久平和と人民民主主義のために」（日本語版）。

(22) 一九五五年七月二十二日付第二九号「恒久平和と人民民主主義のために」（日本語版）。ブレジンスキー教授が入手した資料によると、この総会の席上モロトフは、新政策に内在する危険を指摘し、チトーはもはや共産主義者ではないといい、もしチトーがコミンフォルムから追放されなかつたならば、ポーランドがユーゴスラヴィアの道を追つたであろうと論じた、という。Brzezinski, op. cit., p. 176.

(23) シュワルツ教授は、二十回大会の前夜に正統派の見解がふたたび現われ、フルシチョフ路線が一時後退したとのべて、カガノヴィッチとドゥビナの論文および十月革命記念日のスローガン（註(5)参照）の三つをその証拠としてあげている（Schwartz, op. cit., p. 134.）。しかし、カガノヴィッチはシュワルツ教授が引用した部分のすぐあとで、「プロレタリアート独裁は強制だけにかぎられるものではなく　第二のそして第三の面」があることを指摘しているし（十月革命記念日での演説、一九五五年十一月七日付、『プラウダ』紙）、またドゥビナが社会主義への異なつた道についての「おしやべり」を非難しているのは、前後の関係からみてユーゴスラヴィアを指しているのであつて中国ではない（К. Дубина, "Ленинская теория социалистической революции," Коммунист, no. 15 октябрь 1955 г. стр. 84.）。

なおフルシチョフ路線の形成にあたつて見落してならないのは、一九五五年九月のモロトフの自己批判とそれに続く党宣伝に関する一連の批判である。В. Молотов, "В редакцию журнала, 'Коммунист'," Коммунист, no. 14 сентябрь 1955 г.; "Связь теории с практикой и партийная пропаганда", no. 14 сентябрь 1955 г. 同年十月号の『経済学の諸問題』誌で科学アカデミー経済研究所長のジャチェンコは、ソ同盟経済学界の不毛をきびしく自己批判し、ソ同盟の経済学者がマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの命題をただオウムがえしにくり返すだけで、具体的に突込んで研究せず、以上の先覚者たちの言葉を引用することだけに骨をおり、引用の多いことをもつて博学と心得て、ほかのものが引用していない言葉を発見するとそれを学問の進歩とみなしている事実を激しく攻撃した。

(24) И. А. Архипов, "Чем объясняется разнообразие государственных форм диктатуры пролетиарта?," Вопросы философи. no. 6 1955 г. стр. 261.

(25) Там же., стр. 257.

(26) Там же., стр. 262.

(27) Там же., стр. 257.

第二節　二十回大会と社会主義への中国の道

一九五六年二月に開かれたソ同盟共産党第二十回大会において、フルシチョフは、一九五四年十月の北京訪問と一九五五年五月のベルグラード訪問での成果をふまえて、「社会主義への多様な道」というテーゼを自信をもつて提起した。フルシチョフはまず、「世界の舞台での根本的な変化につれて、社会主義への移行について新しい見通しが開けてきている」[1]とのべ、社会主義への道の多様性に関するレーニンのテーゼを引用したのち[2]、東欧と中国の人民民主主義およびユーゴスラヴィアを引きあいにだした。

「社会主義の原則にもとづいて社会を改造する形態には、ソヴィエト形態と並んで人民民主主義形態がある。この形態はポーランド、ブルガリア、チェコスロヴァキア、アルバニアその他ヨーロッパの人民民主主義諸国で生まれ、これ等の国のそれぞれの具体的な歴史的社会経済的諸条件と特殊性とに応じて活用されている。この形態は、十年にわたつてあらゆる面からためされ、完全にその価値を実証した。[3]」

「革命の勝利まできよくたんにおくれた半封建的半植民地的性格の経済をもつていた中華人民共和国は、社会主義建設の事業で多くの特色をあらわしている。この人民民主主義国家は、決定的な指導的地位の獲得にもとづいて、社会主義革命の発展の過程で私営工業と私営商業を平和的に改造し、しだいに社会主義経済の構成部分にかえてゆくという方針を実行している。[4]」

「権力が勤労者に属し、生産手段の社会的所有が社会の土台となつているユーゴスラヴィア連邦人民共和国では、社会主義建設の過程で、経済管理と国家機関の組織の独特の具体的形態が生まれつつある。[5]」

ついでフルシチョフは、社会主義への道が暴力＝内戦をかならずともなうというこれまでの見解をはつきり否定した。ある国においては「議会的方法」によつても社会主義にいたることができる、とさえフルシチョフは主張した。

「レーニン主義は、支配階級がみずからすすんで権力を譲ることはない、と教えている。しかし闘争がどのていどに激しくなるか、社会主義への移行に暴力を使うか使わないかは、プロレタリアートの態度できまるのではなくて、むしろ搾取者がどのていどに抵抗するか　暴力を使うかどうかによつてきまるのである。

最初に社会主義への移行をやりとげたロシヤのボリシェヴィキにとつては、平和的＝議会的な道はとざされていた。レーニンは別な道、つまりソヴィエト共和国の樹立という当時の歴史的条件のなかでは唯一の正しい道を示した。われわれは、この道を通つて世界史的な勝利を収めたのである。[6]」（傍点は引用者）

フルシチョフのべるところによれば、社会主義へのソ同盟の道すなわち「ソヴィエト形態」は、革命当時ブルジョアジーが強力な反革命勢力であつたというロシアの特殊な条件にたいする不可避的な、それゆえソ同盟にのみあてはまる方式であつたというのであ

り、したがつて現在の諸条件のもとでいくつかの国の労働者階級は「議会内で安定した多数を占め、議会をブルジョア民主主義の機関から真に人民の意志を代表する道具にかえる可能性をもつている」[7]ことを強調する。社会主義への「議会的」な道を提起することによつて、フルシチョフは、「労働者階級が十分の力を示すならば社会主義の建設は平和的に達成される」という中共の見解をのりこえたのであつた。シュワルツ教授が論じたように、フルシチョフがこの演説のなかでいわんとしたことは、ソ同盟がいまなお関心をもつているのは世界の共産主義者が権力を獲得することであつて、もはや彼等が権力獲得の過程でとる戦略や戦術ではない[8]」ということであつた。

たしかに、「社会主義への移行の形態はますます多様になるであろう[9]」ことを宣言したこの演説において特徴的なことは、フルシチョフが国家権力の本質を規定する概念としてこれまでかならず使われていた「プロレタリアート独裁」を用いていないことである。

「社会主義への移行の形態はどうあろうとも欠くことのできない条件は、その前衛を先頭にたてた労働者階級の政治的指導である。それなくしては、社会主義への移行はできない[10]。」（傍点は引用者）

フルシチョフは「プロレタリアート独裁」を広義に解釈し、中共とユーゴスラヴィアの主張する「労働者階級の政治的指導」を用いた。フルシチョフは、こうして中共およびユーゴスラヴィアの見解に歩みよつたのである。

二十回大会におけるいくつかの演説のなかで、中国に関して目立つた論評を加えたのはシェピーロフである。「中国の社会主義革命の歩みは、その独自性によつていちだんときわだつている。人民の権力が革命によつて確立されたのち、中国共産党はマルクス・レーニン主義を創造的に適用しながら、中国の諸条件のもとでは、『平和的な方法によつてつまり説得と教育の方法によつて……資本主義的所有を社会主義的所有に変えることができる』という結論に達した[11]」（傍点は引用者）とシェピーロフは主張した。「マルクス主義を本だけで学んだ学者ぶつた連中の考えからすれば、搾取者的所有を社会主義的所有に変えるという問題にたいするこのような態度は、おそらくマルクス・レーニン主義の諸原則の侵害であろう。だが実際には、これは行動における創造的マルクス・レーニン主義であり、英雄的な中国共産党が大胆賢明に行つている中国の具体的な諸条件へのマルクス主義弁証法のたくみな適用である[12]。」

しかし、これ等のテーゼを「妥協主義者」や「日和見主義者」にたいするボリシェヴィキ的警戒の緩和と誤解しないように、この大会においてとくに社会主義への「平和的な発展の道」を論じたミコヤンは、次のことを強調した。

「史的唯物論は、資本主義に社会主義がとつてかわり、階級社会に無階級社会がとつてかわることを革命的飛躍であると教えている。この移行は、本質的には、一つの社会制度が他の社会制度に革命的にとつてかわることである。だから資本主義から社会主義への移行、社会諸関係における変革はすべて革命である。それは激しさのていどに差はあつても、あらゆる民族が行なう革命であ

る。人民が権力を握り、生産手段の所有が私的形態から社会的形態へ移行することは、歴史上の最大の変革である。だからこそ、個々の国における革命の発展の平和的な道の可能性についての問題を、改良主義と混同してはならないのである。革命は、平和的であろうと平和的でなかろうと、つねに革命である。[13]」（傍点は引用者）

一九五六年二月号の『コムニスト』誌に発表されたソボレフ「社会主義陣営の全世界史的意義」および同年五月号の『国際生活』誌掲載の同「資本主義から社会主義への移行のいくつかの形態について」の二つの論文は、フルシチョフのテーゼを敷衍したものであるが、注意して読むときわめて興味ある事実に気がつく。前述のようにフルシチョフは二十回大会で、社会主義への過渡期における国家権力を「労働者階級の政治的指導」とした。最初の論文においてソボレフは、これを東欧に関しては「プロレタリアート独裁」と同一の概念であると解釈し、東欧諸国の社会主義革命における権力の本質を「プロレタリアート独裁」と規定した。[14]だが、ソボレフは中国が社会主義へ移行していることを認めながらも、そこにおける国家権力の性格を論じるのをさけているのである。[15]ところが次節で検討するように、同年四月五日中共が「中国の人民民主主義はプロレタリアート独裁である」ことをはじめて明らかにしたのちに発表した論文のなかで、同じソボレフは、中国の社会主義革命における政治権力を「人民の権力」と規定しながらも、その本質を「プロレタリアート独裁」であるとした。「　政治の分野では、すでに一九四九年に社会主義革命の諸任務が事実上解決されていた。政治権力は、現実に労働者階級の手中に集中され、労働者階級のまわりには人民の大多数が団結していた。中国には、[16]労働者階級の独裁をその階級的本質とする人民の独裁が確立された。」

ついで、一九五六年九月の中共八全大会に出席したミコヤンは、「中国共産党は……プロレタリアート独裁の形態の一つである人民民主独裁を打ちたてて、中国における社会主義の勝利をめざして闘つている。[17]」とはつきりのべた。彼はまた、考えうる最大限の表現を使つて中共の偉業をたたえた。中共はマルクス・レーニン主義の基本的原則を中国の具体的な条件に創造的に適用することによつて、「まだ他の国で行われたことはない」が「自分の特徴をもち、自国の実際状況にもつとも適した社会主義建設の新しい形態と方法」を発展させた、[18]とミコヤンはいつた。「ソ同盟のよい経験を利用し、われわれの犯した若干の誤まりをさけて、[19]」、「国家資本主義の段階を通じて民族資本主義の企業をしだいに社会主義的企業に改造」していることを、詳細に論じた。[20]「こうして、われわれの事業の敵や日和見主義の行つている誹謗、つまりマルクス・レーニン主義はロシアには適用できるが他の国には適用できないとか、あるいはヨーロッパには適用できるがアジアには適用できないといつた誹謗は、現実によつて徹底的に覆えされ粉砕された。[21]」

このようにソ同盟は、二十回大会において中共の主張に完全に調子をあわせたのにもかかわらず、「中国の人民民主主義はプロレタリアート独裁である」という中共理論の思いもよらぬ発展によつ

て、ふたたびそれに調整をよぎなくさせられた事実が、以上の論説からわかる。

(1) 『ソ同盟共産党第二〇回大会』合同新書版、第一分冊四五頁。
(2) 第二章第一節註（6）で引用。
(3) 前掲『二〇回大会』四六頁。
(4) 同四六頁。
(5) 同四六―七頁。
(6) 同四七―八頁。
(7) 同四八―九頁。
(8) Schwartz, "Ideology and Sino-Soviet Alliance," p. 135.
(9) 前掲『二〇回大会』四七頁。なお同二二頁も参照。
(10) 同四九頁。フルシチョフが用いているロシア語を示せばいつそう明瞭であろう。すなわち彼は "диктатура пролетариата"（プロレタリアート独裁）ではなく、"политическое руководство рабочего класса"（労働者階級の政治的指導）を使つている。Правда, 15 февраль 1956 г. стр. 4. フルシチョフだけでなく他の指導者――ミコヤン、シェピーロフ、スースロフなども同様である。彼等の演説は同第一、第二分冊に収録されている。
(11) 同第一分冊二二七頁。
(12) 同二二七頁。社会主義への「中国の道」に関して、ソ同盟指導者のなかに見解の対立のあつたことを暗示している。第一節四六頁参照。
(13) 同第二分冊二九頁。
(14) A. Соболев, "Всемирно-историческое значение социалистического лагеря," "Коммунист, февраль no. 3 1956 г. стр. 19.
(15) Там же., стр. 20.
(16) ソボレフ「資本主義から社会主義への移行のいくつかの形態について」、『世界政治資料』第二号（昭三一年十月）六頁。
(17) 『中国共産党第八回全国代表大会文献集』一九五六年、北京・外文出版社、第三巻一九頁。
(18) 同二四頁。
(19) 同二八頁。
(20) 同二四頁以下。
(21) 同二一頁。

第三節　中共八全大会と中国の「人民民主主義」

一九五六年は、中ソのイデオロギー関係において重要な年であつた。二十回大会においてフルシチョフは、社会主義革命における政治権力を「労働者階級の政治的指導」と規定して中共の主張に歩みよつたのにたいし、おもしろいことに中共は逆に「プロレタリアート独裁」という正統の概念を持ちだしている。(1) すなわち、同年四月五日付『人民日報』紙に「中共政治局拡大会議における討議に基いて書かれた」という異例の形で掲載された「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」と題する論文のなかで、「人民民主独裁はプロレタリアート独裁である」ことをはじめて中共当局が表明したのであつた。

「プロレタリアート独裁（中国では労働者階級の指導する人民民主独裁である）は、いまや地球上九億の人口を擁する地域で偉大

な勝利をかちとつている。[2]」（傍点は引用者）

この論文は、社会主義への「多様な道」について言及していないが、チトーをソ同盟の直接の支配下におこうとしたスターリンを批判して、「スターリンは……国際共産主義運動……とりわけユーゴスラヴィアの問題について誤まつた決定を行なつた」とのべた。[3]またこの論文は、スターリン主義戦術の「教条主義」的適用をかたく戒めることによつて、各国の共産党は戦術を形成する過程においてそれぞれの国の特殊性を考慮にいれる必要性のあること、それゆえより多くの自主性を付与せられるべきであることを暗示した。[4]さらに同論文は、いかなる共産党といえども将来誤謬を犯さないことはありえないとのべて、ソ同盟共産党の「絶対無誤謬性」を否定し、同党がその見解や政策を他の党におしつけるべきでないことを暗黙のうちに示した。[5]

次いで同年九月後半に開かれた中共八全大会は、これらの問題について創造的な決定を行なつて、二十回大会に劣らぬ画期的な大会となつた。この大会で「政治報告」を行なつた劉少奇は、中国の「人民民主主義」について次の三つのテーゼを提起した。

㈠ 「人民民主独裁」は、中華人民共和国の成立以後「プロレタリアート独裁」の一形態となつた。

㈡ 中国における「プロレタリアート独裁」は、労働者階級と民族ブルジョアジーとの階級同盟をその内容の一部分に包含する。

㈢ 中国の民主諸党派は、社会主義革命の完了後も存続する。

第一のテーゼについて劉少奇はこう説明する。

「中華人民共和国が成立してから、労働者階級が数億の農民と強固な同盟を結んで全国的な支配権を確立し、労働者階級の政党である中国共産党が全国の政権を指導する政党となつたことによつて、人民民主独裁は事実上すでにプロレタリアート独裁の一つの形態となつた。これによつてブルジョア民主主義の性質をもつたわが国の革命は、平和な道を通つて直接プロレタリア社会主義の性質をもつた革命に移り変ることができるようになつた。したがつて中華人民共和国の成立は、わが国のブルジョア民主主義革命の段階が基本的に終り、プロレタリア社会主義革命の段階が始まつたことを示し、わが国が資本主義から社会主義へ移る過渡期に入つたことを示している。[6]」

すでに論じてきたように、中華人民共和国の成立によつて新民主主義革命が社会主義革命に成長転化したことは、五三年秋の「過渡期の総路線」が明確にしたところである。しかし国家権力の本質については、「総路線」においても（例外として劉光弟）、またこれを土台としている五四年の憲法においても、積極的に論じられなかつた。それゆえ、中共が四九年以来用いている「人民民主独裁」という規定と、「過渡期の国家権力はかならずプロレタリアート独裁である」というレーニンのテーゼとは、いつたいどのような関係にあるのか――この問題をめぐつて中国研究家のあいだに当惑とまた活発な論争をまき起していた。したがつて劉少奇の報告は、まさにこの問題にたいする、中共のはじめての公式回答であつた。

「わが国の人民民主独裁は、ブルジョア民主主義革命と社会主義革命の二つの時期をへてきた。ブルジョア民主主義革命が全国で勝利する前に、革命根拠地ではすでに人民民主独裁が打ちたてられていたが、この種の独裁はブルジョア民主主義革命の任務を解決するためのものであつた。……人民共和国が成立してからは、人民民主独裁は資本主義から社会主義へ移つて行くという任務……を担い始めた。このような権力は、本質的にいつてプロレタリアート独裁にほかならない。[7]」（傍点は引用者）

劉少奇ののべるところにしたがえば、名前は同じ「人民民主独裁」であつても、人民共和国の成立を機として実質的には「革命的諸階級の連合独裁」（新民主主義論）から「プロレタリアート独裁」に変つたのであり、レーニンのテーゼは守られているというのである。彼は続けて次のようにいつている。「わが国のブルジョアジーが社会主義的改造を大喜びで受けいれているという奇蹟は、まさにプロレタリアート独裁の正しい指導の偉大な力を物語つており、プロレタリアート独裁が絶対に必要であることを物語つている。[8]」（傍点は引用者）

このように中共は、「人民民主独裁はプロレタリアート独裁である」という公式の見解を明らかにしたが、しかしながら社会主義革命の段階に入つてからも民族ブルジョアジーが階級として容認され、さらに政治的地位も保障されているのだから、問題は新たな問題を生みだしたにすぎない。たしかに劉少奇は、民族ブルジョアジーが社会主義的改造を受けいれる「奇蹟」が行なわれている点で、ソ同盟とは違つたものとして、すなわちプロレタリアート独裁の「一形態」と規定したのであろう。それにもかかわらず、プロレタリアート独裁は民族ブルジョアジーの政治的地位の承認とどのように両立するのであろうか。劉少奇の第二・第三のテーゼは、この疑問にたいする回答である。しかし、これらのテーゼは五六年四月に開始され五七年の中頃まで続けられた「百家争鳴・百花斉放」「長期共存・相互監督」「人民内部の矛盾」の一連の運動と密接な関係をもつており、それらについては別に稿を改めて論じたいので、ここではテーゼを指摘するにとどめておく。

この年の暮もおしつまつた十二月二十九日の『人民日報』紙に発表された「ふたたびプロレタリアート独裁の歴史的経験について」と題する一万六千語の大論文は、ハンガリー事件にたいする中共の論評として、あるいは社会主義陣営内部の矛盾を論じたものとして重要な論文で、われわれのテーマからみても見落しえない。同論文は移行の問題に関して、教条主義・修正主義のどちらにも強く反対している。

「マルクス・レーニン主義は、人類社会の発展には共通の基本法則があるとみている。だが各々の国や民族には、また千差万別の特徴がある。したがつて、どの民族もすべて階級闘争の道をたどりそして最後には基本的な点では共通していても、具体的な形の上では各々に異なつた道を通つて共産主義へと進んで行くのである。自民族の特徴に基いてマルクス・レーニン主義の普遍的真理を巧みに応用することによつてのみ、どの国のプロレタリアート

の事業も初めて成功を収めることができる。……教条主義者は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理が一定の民族的特徴を通じてのみ実際生活のなかに具体的に現われ作用することを理解していない。[9]」

「教条主義に反対する今日の潮流のなかには……ソ同盟の経験の引き写しに反対することに名を借りて、ソ同盟の基本的な経験がもつ国際的な意義を否定したり、マルクス・レーニン主義を創造的に発展させることに名を借りて、マルクス・レーニン主義のもつ普遍的真理としての意義を否定したりするものがいる。スターリンおよびいくつかの社会主義国のこれまでの指導者が、社会主義的民主主義を破壊するという重大な誤まりを犯したことから、共産主義の隊伍のなかの立場のしつかりしていない一部の者は、社会主義的民主主義を発展させることに名を借りて、プロレタリアート独裁を弱めまたは否定し、社会主義国の民主主義的中央集権制を弱めまたは否定し、党の指導的役割を弱めまたは否定しようとしている。[10]」

中共は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理、世界のどこにでも適用されるべき基本的経験の一つとして、「プロレタリアート独裁」を強調した。「プロレタリアート独裁は、反革命勢力にたいする独裁を、もつとも広範な人民の民主主義すなわち社会主義的民主主義と緊密に結びつけたものでなければならない。　プロレタリアート独裁が強力であり、国内国外の強大な敵に打勝つて、社会主義を実現する偉大な歴史的任務を担うことのできるわけは、ほかでもなくそれが搾取者にたいする勤労大衆の独裁、少数のものにたいする絶対多数のものの独裁だからであり、またそれが広範な勤労人民にたいしどのようなブルジョア民主主義も実現することのできない民主主義を実現するからである。広範な勤労人民との密接なつながりを失い、彼らの積極的な支持を失えば、プロレタリアート独裁というものはありえない。階級闘争が激しくなればなるほど、プロレタアートはもつとも断乎とした、もつとも徹底した態度で広範な人民大衆に頼り、彼らの革命的積極性を発揮させて、反革命勢力に打勝つことがますます必要となつてくる。[11]」こうのべた後この論文は、次のような重要な発言をした。

「レーニンは、プロレタリアート独裁の学説がマルクス主義の眼目であり、プロレタリアート独裁を認めるかどうかというこの点に、『マルクス主義者と凡庸な小ブルジョア（および大ブルジョア）とのもつとも深い相違がある』とくり返し指摘している。[12]」

このレーニンのテーゼは、彼が『国家と革命』のなかで提起したものであり（第二章第一節で引用した）、一九四八年以後の時期において人民民主主義理論を正統化するためにソ同盟によつてひんぱんに用いられてきた。[13] それゆえ、このテーゼがこれまでのようにソ同盟でなく中共によつて使用されたこと、および中共がかかる発言をなしたのはこの論文が最初であること――この二つの点に注目する必要がある。

（1）　シュワルツ教授は、中共がプロレタリアート独裁を主張してソ同盟の理論に調整したのは、フルシチョフがこの概念を用いながら

も、その内容に関しては正統の見解をすべて除去してしまつたからである、すなわち中共の主張を容認したからであると論じている。Schwartz, "Ideology and Sino-Soviet Alliance," pp. 138-139.

(2) 『人民中国』一九五六年七月号付録、九頁。
(3) 同六頁。
(4) 同八―九頁。
(5) 同九―一〇頁。
(6) 『中国共産党第八回全国代表大会文献集』（北京・外文出版社）第一巻二四頁。
(7) 同八四―五頁。
(8) 同八六頁。
(9) 『人民中国』一九五七年三月号付録、一一頁。
(10) 同一二―三頁。
(11) 同一三頁。
(12) 同一四頁。
(13) 一九五四年後半以後フルシチョフによつてしばしば引用されているレーニンの言葉は、第二章第一節の註（6）であげたものである。

第六章　結　論

一九五六年、フルシチョフが「プロレタリアート独裁」を広義に解釈し、他方中共が「人民民主独裁はプロレタリアート独裁の一形態である」と明言したため、四九年秋以来中ソ両国の間で緊張の原因となつていた問題は解決された。しかし本論で論じたように、同年秋の中共八全大会における劉少奇の演説は、「中国におけるプロレタリアート独裁は民族ブルジョアジーの政治的参加を許容する」として、この問題に新しい問題を提起していた。そして五六年から五七年前半にかけての時期において、民族ブルジョアジーや知識人との「長期共存・相互監督」、「百家争鳴・百花斉放」などの全国的な運動がくり拡げられた。他方五六年六月のソ連・ユーゴ共同宣言およびポーランドのポズナニ事件、同十月のポーランド政変さらに十一月のハンガリー動乱と続く東欧の変動の過程において、中ソのあいだに、「社会主義への多様な道」に関して解釈の相違のあることがわかつた。ポーランドの行き方を「民族共産主義」と攻撃したソ同盟に反対して、中共はゴムルカをはつきり支持したのであつた。

五六年から五七年前半にかけては、中共が自ら「毛沢東思想」と呼んでたたえている中国の方式、つまり中共独自の「プロレタリア独裁」の完成に向つて努力していた時期であつたといえるかもしれない。これまでに示された多くの独創性と世界共産主義運動の新しい動きのなかで、中共がその大地に咲く社会主義のあり方について、いつそうの探究を続けて行つたのは当然であろう。この時期の中共の政策を論じて、「毛沢東がワナを仕掛けた」とする見方がある。筆者はこの見解には賛成できない。毛沢東は中国人民の基本的団結を信じ、彼が用いてきた方法によつてこの団結が保持されていること、また保持されうると信じていた。彼はブルジョア思想をもつ人がいることを知つていたし、彼らが誤まりを犯していることを

知つていた。整風運動の目的は、こうした誤まりの再発を防止することであつた。しかし毛沢東の理想は幻想にすぎなかつたことがやがてわかつた。人民についての鋭い観察者であることをかつて自ら立証した毛沢東は、人民の内部に積り積つていた大きな不満を理解できなかつたのである。こうして五七年の後半になると、中共のイデオロギーは大きく後退してゆく。すなわち整風運動は停止され、他方社会主義への「独自の道」についての主張も姿を消してしまう。今日のいわゆる「中ソ論争」は、ここから生まれた。

ここで、最初に提起した問題に立ち帰らねばならない。中ソ関係をどのように把捉すべきであろうか。この問いは、むろん以上のような考察だけからは十分な解答をもたらしえないであろう。少くともこの論文の中で究明しえた中ソのイデオロギー関係は、どのようなものであろうか。

毛沢東を先頭とする中国共産党は、ドクトリン・マインドである前にプラクティス・マインドであつた。彼等は、まず革命の当面する課題を「現実的」＝「独創的」に解決し、しかるのちにその経験からの論理的帰結と正統理論との「調整」をはかつた。この方式の過去におけるもつともよい例は、農村に革命根拠地を建設し、それを拡大し、それによつて都市を包囲するという形で一九四九年に勝利をえたことである。この革命戦略が党の指導的路線となつたのは、一九三五年一月の遵義会議においてであつた。それまでの中共は、コミンテルンの指令のみに従うまつたくドクトリン・マインドな党であつた。コミンテルンの戦略路線は、はじめロシア革命と同様に都市における労働者階級の蜂起によつて政権を奪取することにおかれ、その後ソヴィエト区運動が認められたのちもそれは都市の運動と調整をとりつつ進められるべきであるとされた。こうした戦略は、一九三四年のソヴィエト区喪失にいたるまであいつぐ失敗をもたらした。都市のプロレタリア基盤を離れては、プロレタリアートの党である共産党が革命に勝利をうることはありえない、という教義に党が忠実であろうとするかぎり当然の結果であつた。

毛沢東は、中国が工業のおくれた後進国であり、また党のプロレタリア基盤が脆弱であるという中国社会の現実にもとづき、革命を成功に導きかつ新しい政治秩序を確立するには、中・貧農はもちろん帝国主義に反対する民族ブルジョアジーやそれを代表する民主党派をも総動員せねばならない、と断定したのであつた。もちろんこの総動員を可能にしたのは、一九三五年の「抗日民族統一戦線」の結成いらい培われてきた幅広い統一戦線であつたが、それもまた同様に中共が中国革命の経験をしつかりとふまえたところから生まれた政策であつた。こうした「歴史的経験」から、中国共産党は人民共和国の成立後さらに、民族ブルジョアジーの平和的な社会主義的改造、平和的な農業集団化、社会主義革命における民主諸党派との協力といつた現実的＝独創的な理論をひきだすことができたのである。

「毛沢東によつて発展させられた中国共産主義は、共産党というものは、レーニン主義の路線に沿つて組織され、マルクス・レーニン主義の基本的な教義に忠実であるかぎり、プロレタリアートとの

有機的な結びつきがなくても存在できる、という事実を明示している」[1]とシュワルツ教授は論じている。教授によれば、ボリシェヴィーキ党の構造を有し、かつマルクス・レーニン主義を信奉する指導者に導かれた中国共産党は、農民・知識人はもちろんブルジョアジーでさえも、プロレタリアートの階級意識をもつた社会主義的人間に改造できる。中国では、まさにかかるプロレタリアートの階級意識をもつた全「人民」が社会主義革命を遂行している、というのである。したがつて、同じマルクス・レーニン主義にもとづいていながら革命の内容が違うのは、ソ同盟や東欧の場合とは与えられた条件が違うからであつて、「原理」が違うゆえではない。毛沢東がスターリンの指令に反して中国革命を成功に導き、さらに社会主義革命を指導できたのは、彼がマルクス・レーニン主義に忠実であり、かつそれを創造的に発展させたという[2]不変の「確信」に基いているからであつて、そうであればこそ、スターリンから冷飯を食わされても反抗したり離脱したりすることなく、黙々として自己の信ずる革命戦略を実行し、社会主義建設に努めることができたばかりか、深くスターリンを尊敬し、ソ同盟を先頭とする社会主義陣営の団結をはかることができたのである。マルクス主義の科学が客観的条件に立脚するものであり、そして中共がそれを中国の現実に創造的に適用したのであるかぎり、ソ同盟と中国の革命の内容が同一となることは決してありえないであろう。

われわれにとつて重要なのは、社会主義建設をめざす中ソ両国のいずれの方法論が、マルクス・レーニン主義に妥当するかの吟味ではない。モスクワがたとえどんなに苦心して中共を抑えつけようとしても、社会主義陣営内における中共の地位、とくにイデオロギー的立場はたえず上昇していて、それにつれて新たな問題が生まれ、中ソ関係はいよいよ複雑なものになつてきている。中ソ関係は単純簡明なものではない。イデオロギー、政治、経済、軍事上の強固なきずなが、北京とモスクワを結びつけている。中ソ両国とも、その同盟関係から大きな利益をえているから、もし同盟関係が崩れるようなことがあれば、両国ともに非常に大きな代償を支払わねばならないであろう。だから、中ソ関係の分裂を期待するよりも、中ソの間には早くからいちじるしい緊張、対立、見解の相違などがあり、この同盟関係が進展しつづけるにつれて、その内的関係においても不断の変化が生じ、それが両国の各々の政策を左右するばかりでなく、全社会主義陣営の外部世界にたいする政策をも左右している事実に注意を向けるべきではないであろうか。

(1) Schwartz, "Chinese Communism and the Rise of Mao," p. 191.

(2) 中共が「マルクス主義を創造的に発展させた」とか、マルクス主義の宝庫に創造的な貢献をした」とかいうとき、それは中国の現実に創造的に適用したということであつて、マルクス主義の「原理を創造的に発展させたということではない。

附記　本稿は石川忠雄教授に提出した修士論文を、同教授の御指導の下に書きあらためたものである。